

令和元年9月27日現在

機関番号：34431

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03743

研究課題名(和文) ポジティブ心理学介入の効果検証システムの構築

研究課題名(英文) positive psychological intervention: development and construction of evaluation

研究代表者

島井 哲志 (shimai, satoshi)

関西福祉科学大学・心理科学部・教授

研究者番号：30136973

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,000,000円

研究成果の概要(和文)：ポジティブ心理学による介入を実証的に検証するための基盤を形成することをめざして活動した。すなわち、ファシリテータ養成のための教材(強みカルタなど)の製作、ポジティブ心理学のワークブック(「ポジティブ心理学を味わう、北大路書房)の翻訳や関連の書籍出版(「ポジティブ精神医学」金剛出版；保健と健康の心理学 ナカニシヤ出版)、ファシリテータ養成ワークショップ開催(ストレス学会研修会他)、効果評価の尺度開発(SHS, MLQ他)、シンポジウムの開催(公衆衛生学会、日本心理学会、社会心理学会)、また、成果を国際学会(ヨーロッパ健康心理学会、ヨーロッパ・ポジティブ心理学会、人生の意味国際会議)で報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ポジティブ心理学介入は、参加者が自分のポジティブな側面に気づき、自発的・内発的な活動につながるものである。しかし、その実践的・理論的な整備は十分ではなく、対象の状態に応じた標準的で効果のある手続きも確立していない。ここでは、理論的で技術的な確立を目指して、多面的な研究実践を行ってきた。ニーズの把握や効果評価に必要な標準的な測定指標の開発と普及、気づきを高めるツールの開発、ファシリテータ・指導者の養成やワークブックの出版などである。これらは、実践的活動であると同時に、その技法の開発や効果評価の情報提供や交流を通じて、ポジティブ心理学の理論的な基盤を確立するネットワークづくり活動につながっている。

研究成果の概要(英文)：The present project was to provide the basis for empirical research of the positive psychological intervention. That is, the production of educational materials for facilitator training (such as strengths Karuta), translation and publishing of the workbook of Positive psychology from APA (Kitaaji Shobo) as well as the other related books (Positive Psychiatry, Kongo publishing), facilitator training workshop (Stress Research Society), development of scales for effectiveness evaluation (SHS, MLQ, etc.), symposium (Japanese Public Health Association, Japanese Psychological Association, Japanese Social Psychology Association). In addition, the activity and research results were reported at the International Conference (European Society of Health Psychology, European Society of Positive psychology, and the meaning of life in international conferences).

研究分野：心理学

キーワード：ポジティブ心理学 強み 幸福 ウェルビーイング 介入

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

### ポジティブ心理学に基づく介入の発展

ポジティブ心理学は、M. E. P.セリグマンによって提唱されたものである。これは、こころのポジティブな働きに焦点を当てた研究と実践を推し進めるべきであるという心理学の運動であるが(島井, 2006)、この10年余りで、ポジティブ心理学ハンドブックや、ポジティブ心理学測定ハンドブックをはじめ書籍も多く出版され、国際ポジティブ心理学会の大会開催、ポジティブ心理学誌(Journal of Positive Psychology)の定期刊行など、大きく発展してきた。

当初より、応用を念頭に置いてきたポジティブ心理学は、近年、基礎研究をふまえて、より応用的な実践の開発に進んできており、最近には、ポジティブ心理学介入(Positive Psychological Intervention; PPI)が注目を浴び、PPIのハンドブックも出版されている(Parks & Schueller, 2014)。また、保健医療のエビデンスを構築するためのデータベースである、Cochrane ライブラリにも、現在、うつ病に対する PPI の効果(Sin & Lyubomirsky, 2009)に続いて、乳がんに対する PPI の効果(Casellas-Grau et al., 2014)、そして、PPI の無作為比較試験(RCT)のメタ分析(Bolier et al., 2013)の3編の文献レビューが取り上げられている。

### 多様な介入方法とPERMA

PPI では、親切行動以外にも、感謝、共感性、創造性、強み、ユーモア、忍耐、人生の意味など、さまざまなポジティブな働きが取り上げられる(Parks & Schueller, 2014)。セリグマンは、PPI を強く意識してポジティブな働きを PERMA という言葉でまとめている(Seligman, 2011)。すなわち、ポジティブ感情(Positive emotion)、エンゲイジメント(Engagement)、ポジティブな関係(positive Relationship)、人生の意味(Meaning)そして達成(Accomplishment)である。これらにまとめられたポジティブな働きや、それによる活動をどのように PPI としていかに標準化していくかが今後の課題となっている。ハンドブックでは、PPI の実施方法も、個人対象だけでなく、家族療法、集団療法、オンラインなどの多様なアプローチが紹介されており、また、PPI の対象についても、児童生徒や、大学生、スティグマを受けている集団、統合失調症、喫煙者など多様な集団が取り上げられてきて、それぞれに対して相応しい適用が求められている。

### 持続可能な幸福への資源形成モデル

島井(2015)では、持続可能な幸福であるウェルビーイング及びそれを支える社会を実現するために、感情経験、関係性、仕事や生きがいなどの6種類のポジティブな実践によって、個人資源や関係性などの社会資源を形成していくモデルを提唱している。そこでは、これらの資源の形成にあたっては、エンゲイジメントなどに示される動機づけ要因、複数の活動を用意するなどの活動の多様性の保証、そして、文化的および個人特性の要因も考慮した、個人と活動の適合性が、工夫するべき点としてあげられている。ここでは、このモデルに基づいて、さまざまな集団に即した PPI プログラムを具体化し、その効果を実証的に検証する環境を形成する。

## 2. 研究の目的

本研究がめざしてきたのは、ポジティブ心理学介入(positive psychology intervention; PPI)のエビデンスを構築するための基盤を整備・構築することである。ポジティブ心理学の発展と浸透に伴って、諸外国では、これを活用した PPI が発展してきており、心理学の応用実践領域での標準的な選択肢になってくることが考えられる。コクランライブラリーに収録されている PPI のシステマティックレビューでは、介入効果は明確に示されているものの、一部を除いて介入対象や介入方法、評価方法について十分な標準化には至っていないといえる。ここでは、わが国において、将来にエビデンスのある PPI 手法を構築していくために必要な準備である、評価・実践手法の確立や、手法の訓練の標準化などの環境の整備を行うことで、文化や伝統に根差した PPI 研究の基盤を形成するための研究実践を行った。

## 3. 研究の方法

ここでは、研究実践の基盤づくりとして、ポジティブ心理学介入のプログラムの開発を推進する。具体的には、ファシリテータの養成、エビデンスのある介入実践によるモデル、評価尺度の開発と標準化、教材開発、介入プログラム開発とパッケージ化などを行ってきた。ここでは、当初の計画における方法を示す。

### <ファシリテータの養成>

集団あるいは個人を対象として、ポジティブ心理学介入が実施できる人材を育成することを目的とする。ファシリテータ養成では、ロールプレイやグループワーク等の自主的な学習を含めた講座を基本として、修了者には修了証を授与する。養成講座の内容としては、ポジティブ心理学介入を実施するために必要な基礎的知識を享受した後、介入の具体的な内容をグループワークとロールプレイを用いながら訓練する。

### <評価指標などの開発と標準化>

ポジティブ心理学介入のための尺度は現状では十分に準備できていない。海外で標準的に用いられている尺度の日本版の開発も遅れているのが現状である。基盤となる知識構築のためや介入実践のうちに、その研究の為にだけに必要な尺度を日本語化するのではなく、日本版が一般に用いることができるように、尺度を開発し標準化に向けてデータ収集し、利用可能な尺度の普及に励む。

### <エビデンスのある介入実践によるモデル提示>

学校と職域、地域の対象者に対する介入の効果を検証する。学校では、個人を振り分ける無作為化試験の実施は困難であるので、集団としてクラスごとに振り分けることも必要であると考えられる。どの集団においても、対照条件に対しては観察期間後に、PPI を実施する交差条件による計画も必要と考えられる。さらに、さまざまなリスクをもつ集団を対象とする実証研究を実施していく。

#### <教材開発>

教材の中核になるのは、母親教室による介入実践で用いたような、ホームワーク用の日記帳あるいは記録帳であるが、課題だけではなく、個別の教材も、対象者に対応した大きさ、記入スペースやイラストなどを選定して、カラー印刷物として製本作成する。

#### <介入プログラム開発とパッケージ化>

開発の流れとしては以下のように予定している。

ポジティブ活動とポジティブ経験の整理、対象者ごとの個別の問題の整理、課題の選定、プログラム内容の精選、ホームワーク教材の開発、プレゼン資料などの開発、介入マニュアルの作成。マニュアルと下にある教材をあわせてパッケージとして開発する。

#### <広報と浸透のための情報発信>

これらの成果については、国際ポジティブ心理学会や心理・医療系の学会などで順次学会発表をしていくほか、学会誌などに論文として発表していく。また、研究協力者や賛同者を含めてポジティブ介入の研究の連携組織を準備する。

行動科学を活用する医療従事者にも理解しやすく、安全であり、取り扱いやすいスキルであるので、看護学や臨床栄養学、理学療法の学会などでも、積極的にシンポジウムなどを企画し、賛同者を集める。これらの活動と並行して、研究集会を開催し、関連する研究を行っている研究者を発表者として招待して、情報交換をはかる。

### 4. 研究成果

#### <ファシリテータの養成>

2017年のストレス学会の研修会として、学会員外の一般の希望者も受け入れるファシリテータの養成のためのワークショップを開催した。この内容については、ストレス学会の学会誌「ストレス研究」に掲載予定である。

#### <評価指標などの開発と標準化>

主観的幸福感や人生の意味尺度はこれまでに信頼性と妥当性を示して開発してきた尺度であるが、性別・年代別の標準値を公表して、標準化をはかってきた。また、新しい強みの尺度(CST-24)を開発して、尺度論文を準備しているほか、これまでにほとんど検討されていない潜在的強みを測定する方法を検討中である。

#### <エビデンスのある介入実践によるモデル提示>

2016年度には、モデルとなるようなPPIの試みのひとつとして、福島県における母親教室を共同実践した。そこでは、拡張形成理論だけではなく、愛着理論や存在脅威管理理論などの中で、ポジティブ心理学を展開することについて報告した。また、禁煙に対するポジティブ心理学介入の内容について検討し、日本禁煙科学学会で研修会を実施した。

#### <教材開発>

教材の標準化を検討し、ファシリテータの養成のためのワークショップの内容の精選を行うとともに、これらに対応した、教材の開発(つよみカルタ)やワークブックを開発してきた。つよみカルタは、24種類のつよみを理解し強みの活用の支援を考えるための教育ツールである。ワークブックは、北大路書房から「ポジティブ心理学を味わう」というタイトルで出版した(島井哲志・福田早苗・亀島信也監訳)。

#### <介入プログラム開発とパッケージ化>

教育場面でのPPIであるポジティブ教育についても、研究と実践を行い、この成果の一部は、2018年度の教育心理学会での3件の報告をした。また、強みカルタを用いて、自分の主要な強みを活用するポジティブ心理療法のプログラムを実施して、その効果評価を行い論文として公表した(島井・海原, 2019)。

#### <広報と浸透のための情報発信>

これらの活動と並行して、PPIの科学的基盤を充実させるための研究活動を行い、成果についてはヨーロッパ健康心理学会や日本心理学会などで報告した。また、PPIを実施できる人たちのネットワークづくりを積極的に行っており、ポジティブ心理学の研究会(日本心理学会の研究会、看護師の研究会、管理栄養士の研究会)で発信することで、次の計画であるPPIのRCTを行うための組織の基盤づくりを行ってきた。

### 5. 主な発表論文等

#### [雑誌論文](計28件)

1. 子どもたちへの死生観教育の心理社会的基礎—ポジティブ心理学による死生観教育—(共著/筆頭), 平成28年, 保健の科学, 58(8), 518-523.
2. アクティブラーニングとポジティブ心理学(単著), 平成28年, 看護と情報, 23, 1-2.
3. 学校保健とポジティブ心理学—スクール・エンゲイジメントという観点から(単著), 平成28年, 学校保健研究, 57(1), 1(巻頭言).
4. ポジティブ心理学による禁煙支援(単著), 平成28年, 健康心理学研究, 28(SI), 103-111.
5. 公衆衛生活動としてのポジティブ心理学介入の可能性—福島の子どものレジリエン

- スを目指して(共著/筆頭), 平成 28 年, 保健師ジャーナル 72(9), 746-750.
6. Psychometric properties and validation of the Sociocultural Attitudes Towards Appearance Questionnaire-4 (SATAQ-4) with a sample of Japanese adolescent girls. (共著), 平成 28 年, Body Image, 19, 89-97.
  7. 強みを活かすスクール・エンゲイジメント ～ポジティブ心理学から～ 関西福祉科学大学学生相談室活動報告学内講演会報告, 2017
  8. ポジティブ心理学からみたレジリエンス 幸福と健康を増進するために(共著/筆頭), 平成 29 年, 臨床心理学, 17(5), 677-681.
  9. 潜在的強みの測定とその活用: ポジティブ心理学の更なる発展に向けて(共著), 平成 29 年, 関西福祉科学大学紀要, (21), 27-35.
  10. 困難への挑戦心を支える認知的基盤: 領域自尊心に着目して(共著), 平成 29 年, 関西福祉科学大学紀要, (21), 99-106.
  11. 子どものレジリエンシーを育てる、第 26 回 JKYB ライフスキル教育・健康教育ワークショップ報告書、平成 30 年.
  12. 成長モデルから人間を見るーポジティブ心理学の可能性ー(単著: 研修会報告)、いしかわ精神保健, 平成 30 年、59, 1-16.
  13. ポジティブ心理学介入のファシリテータ養成研修(共著), ストレス科学, 平成 30 年, 32(3): 200-209.
  14. ポジティブ心理学によるストレスマネジメントの可能性(単著), 平成 30 年, ストレス科学, 32(4), 292-302.
  15. なぜ日本人の幸福度は世界で 54 位なのか～世界幸福度調査を考える～(単著), 平成 30 年, 心と社会, 49(3): 74-80.
  16. 日本人の主観的幸福感の現状: 加齢による上昇傾向(共著/筆頭), 平成 30 年, 日本公衆衛生雑誌, 65(9), 553-561.
  17. 産後 1 か月の褥婦における睡眠と主観的精神健康感との関連(共著). 平成 30 年, 日本公衆衛生雑誌, 65(11), 646-654.
  18. An exploration of the psychometric properties of the SATAQ-4 among adolescent boys in Japan. (共著), 平成 30 年, Eating Behavior, 32, 31-36.
  19. 産業保健におけるポジティブ心理学の活用 ～ポジティブ心理学からのストレス対策～ (単著), 平成 31 年, 関西福祉科学大学 EAP 研究所紀要, 13, 31-38.
  20. 子どもの幸福とその感染力(単著), 平成 31 年, 教育と医学, 790, 4-5.
  21. 人格的強みの視座に基づく、大学一年生へのリーダーシップ教育の実践(共著), 平成 31 年, 総合福祉科学学会誌, 10, 49-56.
  22. 「強み」とともに生きる: ポジティブ心理学のすゝめ(第 1 回) 自分の「強み」を知る, 書齋の窓, 2018, 11(660), 34-38.
  23. インターンシップ科目実施前後の学生の意識・心理的变化について 総合福祉科学学会誌 10, 9-16、2019 福田早苗、木村貴彦、治部哲也、松村歌子、長見まき子、山内彰
  24. 「強み」とともに生きる: ポジティブ心理学のすゝめ(第 2 回) 二十四の強み, 書齋の窓, 2019, 1(661), 72-76.
  25. 地域女性集団における強み活用によるポジティブ心理療法の効果(共著/筆頭), 令和元年, 日本保健医療行動科学会雑誌, 34(1), 15-21.
  26. 「強み」とともに生きる: ポジティブ心理学のすゝめ(第 3 回) 強みを理解する, 書齋の窓, 2019, 3(662), 85-90.
  27. 「強み」とともに生きる: ポジティブ心理学のすゝめ(第 4 回) 私たちは周りの強みをどう理解しているか, 書齋の窓, 2019, 5(663), 35-40.
  28. 日本人成人の発達段階による人生の意味の変化: 得点レベルと関連要因の検討(共著/筆頭), Journal of Health Psychology Research (印刷中).

[学会発表](計 40 件)

1. Positive psychology intervention and public health (Symposium-2), 6th Asian Conference of Health Psychology, July 23-24, 2016 (Yokohama, Japan), Organizer and Chair: Satoshi Shimai
2. Development of Positive Psychology Intervention Program for Mothers with Infants Affected by Fukushima Nuclear Power Plant Disaster, 9th Biennial International Meaning Conference, Toronto, July 28-31, 2016, Ryo Okubo, Satoshi Shimai, Yuji Tsutsui, and Tatsuo Ujiie
3. 我が国の学校教育におけるポジティブ心理学の貢献可能性, ポジティブサイコロジー医学会, 2016 年 10 月 22 日(龍谷大学), 竹橋洋毅(関西福祉科学大学), 津田恭充(関西福祉科学大学), 島井哲志(関西福祉科学大学), 山田富美雄(関西福祉科学大学)
4. 主観的健康におけるストレス信念の影響, ポジティブサイコロジー医学会, 2016 年 10 月 22 日(龍谷大学), 竹橋 洋毅(関西福祉科学大学)・大久保慧悟(ディップ株式会社)・成田範之(株式会社インテリジェンス ビジネス ソリューションズ)・豊沢純子(大阪教育大学)・島井哲志(関西福祉科学大学)
5. ポジティブ心理学介入の組織づくり, 第 75 回日本公衆衛生学会総会/自主企画シンポジウム 32 「ポジティブ心理要因と健康: 職域・地域のポジティブ資源/ポジティブ心理学介入の

- 可能性」, 2016年10月27日(グランフロント大阪), 企画・司会・発題, 島井哲志
6. ポジティブ心理学によるストレスマネジメント, 第75回日本公衆衛生学会総会/自主企画シンポジウム 32「ポジティブ心理要因と健康:職域・地域のポジティブ資源/ポジティブ心理学介入の可能性」, 2016年10月27日(グランフロント大阪), 山田富美雄
  7. 禁煙支援のためのポジティブ心理学介入, 第11回禁煙科学学会学術集会健康心理分科会, 2016年10月29-30日(京都大学), 島井哲志
  8. 研究倫理と利益相反, 日本健康心理学会 2016年11月19-20日 岡山大学、編集委員会企画シンポジウム、島井哲志
  9. 公認心理師の社会的役割とその養成～国家資格による心理学の社会貢献の充実を目指して、日本健康心理学会 2016年11月19-20日 岡山大学、記念出版委員会企画シンポジウム、企画・司会：島井哲志
  10. ポジティブサイコロジー：理論と応用, 第16回日本認知療法学会・自主企画シンポジウム 6「ポジティブサイコロジー効果による精神予防への発展」, 2016年11月24日(グランフロント大阪), 島井哲志
  11. 成人前期衆参の外傷後成長に関する研究(1)外傷後成長の測定、第23回日本行動医学学会学術総会、2017.3.17-18、沖縄科学技術大学
  12. 成人前期衆参の外傷後成長に関する研究(2)外傷後成長と幸福感、第23回日本行動医学学会学術総会、2017.3.17-18、沖縄科学技術大学
  13. 成人前期衆参の外傷後成長に関する研究(3)外傷後成長と生活習慣、第23回日本行動医学学会学術総会、2017.3.17-18、沖縄科学技術大学
  14. ポジティブ心理学と健康心理学 シンポジスト：島井哲志, 日本健康心理学会(京都橘大学), 広報委員会企画シンポジウム「ポジティブ・メンタルヘルスの作り方ー健康心理学からの提言」 2018年6月23-24日
  15. セリグマンのPERMAモデルに基づくPERMA-Profilerの対象者別の3種類(成人, 学生, 職場用)の日本語版の心理統計量と実践場面における利用可能性, 日本心理学会シンポジウム、2017年9月20-22日(久留米大学) 指定討論:島井哲志
  16. 計画力に関する教育的介入とその効果に影響を及ぼす要因, 日本心理学会第81回大会, 2017.9. 竹橋洋毅・豊沢純子・島井哲志,
  17. ポジティブ心理学介入・入門, 第33回日本ストレス学会ワークショップ, 2017年10月21-22日(関西福祉科学大学) 島井哲志・竹橋洋毅・津田恭充
  18. ポジティブ心理学から見たストレスマネジメント(司会・企画 島井哲志), 第33回日本ストレス学会シンポジウム, 2017年10月21-22日(関西福祉科学大学)
  19. 我が国のポジティブサイコロジーの発展と将来 教育講演:島井哲志, 第6回日本ポジティブサイコロジー医学会(慶應義塾大学・日吉) 2018年11月25日
  20. Character Strengthsを用いた介入に向けて, 日本心理学会ポジティブ心理学研究会(東洋大学) 2017年12月9-10日 特別講演:島井哲志
  21. ストレスマインドセットが主観的健康と幸福感に及ぼす効果, 総合福祉科学会第8回大会, 2018.3. 竹橋洋毅・柏木雄次郎・相谷登・島井哲志,
  22. 健康長寿につながるポジティブサイコロジーの理論と応用、第18回抗加齢医学会シンポジウム 2018年5月26日(土) 大阪国際会議場
  23. 個人の強みや幸福感が大学生の疲労を緩和できるかについての探索的検討 第14回日本疲労学会学術集会(福岡)平成30年5月 福田早苗、島井哲志
  24. Current Status of Subjective Happiness Across Ages in Japan, Shimai, Yamamiya & Arimitsu, 9th European Conference on Positive Psychology, Jun 27-30, 2018, Budapest, Hungary
  25. Age and Gender Differences in Self-Compassion in A Large Japanese Adult Sample, Arimitsu, Yamamiya & Shimai, 9th European Conference on Positive Psychology, Jun 27-30, 2018, Budapest, Hungary
  26. Non-attachment, gratitude, and meaning in life among middle-age to older Japanese adults. Shimai, S., Yamamiya, Y., Arimitsu, K., Sugiura, Y. & Steger, M. , INPM 10th Biennial International Meaning Conference, August 2-5, 2018, Vancouver, Canada.
  27. Meaning in life across life span among Japanese: Increase of the search in older adulthood. Shimai, S., Yamamiya, Y., Arimitsu, K. & Steger, M. , INPM 10th Biennial International Meaning Conference, August 2-5, 2018, Vancouver, Canada.
  28. 日本人の謙遜は意図的か?それとも自動的か? 津田恭充、島井哲志、パーソナリティ心理学会第27回大会 2018年8月26-27日、立命館大学いばらきキャンパス
  29. 能力を高めようとする動機づけの源泉とは何か? 重要なのは自己肯定感か、マインドセットか 社会心理学会第57回大会, 2018.8. 竹橋洋毅・豊沢純子・島井哲志
  30. ポジティブ心理学は社会心理学にどのような示唆をもたらすのか, 日本社会心理学会自主シンポジウム 2018年8月28-29日 追手門学院大学, 企画:竹橋洋毅、吉野優香、島井哲志, 話題提供:久保尊洋、吉野優香、津田恭充 指定討論:大坊郁夫、島井哲志
  32. ポジティブ教育の基礎研究(1)品性の強み質問紙 CST24の開発と高校生の特徴 教育心理学会第60回大会, 2018.9. 島井哲志・竹橋洋毅・宇恵弘・津田恭充・堀田千絵
  33. ポジティブ教育の基礎研究(2)品性の強み質問紙 CST24の妥当性について 教育心理学

- 会第 60 回大会, 2018.9., 宇恵弘・竹橋洋毅・津田恭充・堀田千絵・島井哲志
34. ポジティブ教育の基礎研究(3) 成長マインドセットと品性の強みの関係性 教育心理学会第 60 回大会, 2018.9., 竹橋洋毅・島井哲志・宇恵弘・津田恭充・堀田千絵
  35. ポジティブ心理学研究の最前線, 日本心理学会自主シンポジウム 2018 年 9 月 25-27 日 仙台国際センター, 企画: 堀毛一也、島井哲志, 話題提供: 浅野良輔、一言英文、塩谷亨、堀毛一也
  36. ストレスマインドセットはなぜ健康を改善するのか? - ポジティブ事象への注意バイアス仮説の検証 - 日本心理学会第 82 回大会, 2018. 9., 竹橋洋毅・豊沢純子・大久保慧悟・島井哲志
  37. 大学生の自己コントロールと生活習慣に関する研究 日本心理学会第 82 回大会, 2018. 9., 福田早苗・竹橋洋毅・島井哲志
  38. ポジティブ心理行動介入による心身の健康づくり, 日本公衆衛生学会公募シンポジウム 2018 年 10 月 24-26 日, ビッグパレットふくしま(郡山市), 企画: 大平哲也・白井こころ・島井哲志, 座長: 大平哲也、島井哲志, 話題提供: 福田早苗、上地広昭、白井こころ、島津明人
  39. The determinant of the motivation to improve abilities; which is more important, self-esteem or mindset of the abilities? The Society for Personality and Social Psychology 第 20 回大会, 2019.2., Takehashi, H., Toyosawa, J., & Shimai, S.
  40. ウェルビーイングを高める社会的行動に関する教育実践 竹橋洋毅・島井哲志 総合福祉科学会第 9 回大会, 2019.3.
- [ 図書 ] (計 3 件)
1. 保健と健康の心理学—ポジティブヘルスの実現(監修), 平成 28 年 12 月 20 日, ナカニシヤ出版.
  2. ポジティブ心理学を味わう—エンゲイジメントを高める 25 のアクティビティ(監訳・分担訳), 平成 29 年 8 月 20 日, 北大路書房.
  3. ポジティブ精神医学(分担訳), 平成 30 年 7 月 30 日, 金剛出版.
- [ その他 ]  
 < ホームページ >  
<https://www.fuksi-kagk-u.ac.jp/faculty/psychology/positive.html>

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名: 岩原 昭彦 ローマ字氏名: Iwahara Akihiko 所属研究機関名: 京都女子大学 部局名: 発達教育学部 職名: 教授 研究者番号(8桁): 30353014

研究分担者氏名: 福田 早苗 ローマ字氏名: Fukuda Sanae 所属研究機関名: 関西福祉科学大学 部局名: 健康福祉学部 職名: 教授 研究者番号(8桁): 50423885

研究分担者氏名: 堀田 千絵 ローマ字氏名: Hotta Chie 所属研究機関名: 関西福祉科学大学 部局名: 教育学部 職名: 准教授 研究者番号(8桁): 00548117

研究分担者氏名: 松中 久美子 ローマ字氏名: Matsunaka Kumiko 所属研究機関名: 関西福祉科学大学 部局名: 健康福祉学部 職名: 准教授 研究者番号(8桁): 90368457

研究分担者氏名: 竹橋 洋毅 ローマ字氏名: Takehashi Hiroki 所属研究機関名: 関西福祉科学大学 部局名: 心理科学部 職名: 准教授 研究者番号(8桁): 70583871

(以下、平成 29-30 年度)

研究分担者氏名: 津田恭充 ローマ字氏名: Tsuda Hisamitsu 所属研究機関名: 関西福祉科学大学 部局名: 心理科学部 職名: 講師 研究者番号(8桁): 80635665

研究分担者氏名: 有光興記 ローマ字氏名: Arimitsu Koki 所属研究機関名: 関西学院大学 部局名: 文学部 職名: 教授 研究者番号(8桁): 10341182

(以下、平成 28 年度)

研究分担者氏名: 治部 哲也 ローマ字氏名: Jibu Tetsuya 所属研究機関名: 関西福祉科学大学 部局名: 健康福祉学部 職名: 教授 研究者番号(8桁): 90352989

研究分担者氏名: 亀島 信也 ローマ字氏名: Kameshima Shinya 所属研究機関名: 関西福祉科学大学 部局名: 心理科学部 職名: 教授 研究者番号(8桁): 90241108

(2)研究協力者 研究協力者氏名: 山宮裕子 ローマ字氏名: Yamamiya Yuko  
 平成 29 年度 治部哲也 Jibu Tetsuya、亀島信也 Kameshima Shinya